

---

## 「小谷コレクションと高嶺文庫」

信州大学人文学部准教授

渡辺 匡一

8000 点に及ぶ日本有数の山岳図書コレクション「小谷コレクション」は、小林義正（1906－1975、以下敬称略）が蒐集した山岳図書コレクション「高嶺文庫（たかねぶんこ）」を母胎としている。

小林は中学時代から山に親しみ、丸善（株）に勤務するかたわら、山岳図書の蒐集に東奔西走した。会社員として多忙を極め、実際の山行が許されない生活のなかでも、山の本を繙き、頁をめくるたびに、新たな山へと足を運ぶことができたからである。

山はいつまでも私の心のなかに宿り、またわずかずつながら日々知ることを深める喜びを味いながら、未見の書物を探求していくことによつて、新しい山登りは繰り返されてゆく。かくて一年を通じ、たとえ山に入る日が一、二週間に過ぎなくとも、つねに山とともにある感激は失われずにいるであろう。

（『山と書物』『山と書物』）

蒐集された山岳図書（高嶺文庫）は、18 世紀から現代に至るまで、洋の東西を問わず広範に渡り、3000 冊に及ぶ書物をもとにした研究の成果は、自著『山と書物』（正・続）にまとめられた（1957、1960）。

『山と書物』には、ヨーロッパにおける近代登山確立期の重要な業績（「シュラーギントワイト兄弟の業績」など）や、出版の歴史（「英国の古い山の本屋のこと」など）から、日本における近世期の山岳図書の考察（「富士に関する古書」など）や、近代登山の普及に尽力した登山家たちの評伝（「明治文化に貢献した山にゆかりの外国人たち」など）に至るまで、登山の歴史や出版・文化など多岐にわたる論考が収められており、「山岳図書研究」の意義と可能性が指し示されている。『山と書物』は、山岳図書研究の嚆矢

とも言うべき書と言えるだろう。

昭和 49 年（1974）、老境に至った小林の希望もあり、高嶺文庫は一括して小谷隆一（1924～2006）に譲り渡された。カラコラム・ディラン遠征の登山隊長を勤めるなど、輝かしい登山歴を持つ一方で、中学時代の恩師、森本次男から「山登りとは足で登るだけのものではない」との薫陶を受けた小谷は、山岳図書の蒐集家としても広く知られていた。自宅に運び込まれた高嶺文庫を前に、小谷は、より完全な山岳図書コレクションにするべく、三つのことを心がけたという（小谷隆一『山なみ帖』）。

第一には、古書で欠けている書物を探し求めることである。小谷は、東京、京都、大阪、ロンドンなど国内外の専門店と連絡を取り、常に情報を入手できるようにした。自身も家業（イセト紙工（株））や京都商工会議所（副会頭）の仕事の合間をぬって国内外の書店をめぐる（時にはパリの骨董市にまで出かけていき）、コレクションの補完に努めた。こうして深田久弥旧蔵本や『Travels through the Alps』（J. D. Forbs）、クリスチャン・アルマーのガイド手帳などが、新たにコレクションに加わるようになった。

第二には、新刊書を補充していくことである。小谷は、専門店に依頼し、山に関する新刊書をすべて購入し続けた。

第三には、保存である。増え続けていく図書に対応するため、書庫に移動書棚などを設置する一方、防火には細心の注意をはかり、耐火金庫なども用いてコレクションの保全に努めたのである。

小谷が高嶺文庫を譲り受けてから三十年余が経った平成 15 年（2003）、8000 点に及ぶ日本有数の山岳図書コレクションに成長した「小谷コレクション」は、「多くの人々が活用できるように」と、信州大学山岳科学研究所に寄贈された。信州大学は、小林から小谷へと受け継がれたコレクションの管理・運営を進めていくという重責を担うことになったのである。

今後は、山岳図書の蒐集によってさらなるコレクションの拡充を図るとともに、コレクションの画像データ化を漸次進めて行き、広くその情報を公開していくこと、長野県内外を問わず、山岳図書を所蔵する図書館・博物館などと連携して、ネット上における山岳図書文献の共有化を図ることなどを通して、小林が提唱し、小谷が整備・発展させてきた「山岳図書」という新しい学問領域の可能性、成果を広く社会へと還元するという任に応えたいと考えている。